

(一) 山羊

もの好きな夫婦が山羊（やぎ）を飼いだした。

とある田舎の、とはいえ新興住宅地の一角である。発端は同居しているじい様の一言だった。

「ヤギはよく草を食うぞ。何の草でも食うぞ」

新興住宅地と名がついてはいるものの、200を少し上回る区画の中で、住んでいるのは80軒あまり。3分の2は空き地である。30年前の売り出し当時の買い手の多くは東京におり、投資目的だったのか購入以来一度も来ないのがザラで、草茫々（ぼうぼう）どころか、篠竹（しのだけ）がビッシリと密生したり、大木が生えたりしているところまである。隣家との間に距離があるのは精神衛生上きわめてよろしいが、藪（やぶ）から蚊がおしよせて来るのはきわめてよろしくない。

夫婦は汗を拭きふき草を刈る。が、夏草の茂る速度は凄まじい。刈ってもすぐまた伸びる。萱（かや）の上に葛（くず）が伸び、背丈を優に越す。夫婦は隣の地主を調べ、手紙を出した。返事は来ない。たまりかねているところに「ヤギは草を食うぞ」であった。女房はそれを聞いて笑いころげただけだったが、生き物の好きな亭主は目を輝かせた。

「飼ってみたいねえ」

「え？ マジ??？」

どこで今時山羊が手に入るか。

ペットショップでは売ってはいまい。

高校生の長男によると、同級生の農家の広い庭の端に山羊が1匹いるらしいが、思春期かつ反抗期まっただ中とあっては、「そこで俺の名前を出して聞くような恥ずかしいマネはまちがってもしてくれるな」と目を三角にする。

首をひねったあげく、夫婦は農協に行って聞いてみた。今では日本語でもJAと
いうのか。受付のおねえちゃんは吹き出しそうな表情を必死で隠して行儀よく目だけで笑い、畜産課にまわした。後で笑いころげたに違いない。電話をとった中年男

性は「ははあ、ウチで扱ってはいませんが、飼っているところを知ってます。紹介してあげましょう」。

夫婦して見学に行ってみると、牛小屋の隣で真っ白い山羊が5匹、牛の配合飼料を食べていた。雑種で1匹3万円、血統書つきで10万円と言う。「雄（おす）は凶暴になることがあるから雌（めす）のほうがいいでしょうねえ。野犬に襲われると困りますから檻（おり）が要りますよ。屋根がついて、中で歩き回れるくらいの。それから寝床にする藁（わら）も用意してくださいね」

さっそく大型犬用の背の高いおりを買って組み立てた日はカンカン照りで、浴びるほど水を飲んでも夫婦はふたりして熱中症になりかけた。わらも知り合いの農家に話をして分けてもらい、パイプに防水布を張った小屋を新しく買ってその中に入る。

届いた山羊はすでに生後5カ月になっていた。

「生まれて初めて親と離れましたから、今夜は鳴くかもしれませんよ」

牛の配合飼料を荷台から下ろし、ねじり鉢巻をした親切な農協の係長は、そう言ってトラックで去っていった。山羊は中型犬ほどの大きさはあるが、狭い檻の中でつながれて育ったせいか、足が細くいかにも華奢（きゃしゃ）である。

「まさか1週間で死にはしないよね」。夫婦は顔を見合わせた。

それからひと月近く、細（ほそ）っこい山羊がちゃんと生きのびたのはいいが、鳴くというものではない。ヤギというのはこんなに鳴くのか。こんなに声がでかいのか。

草を食べることだけはまちがいなく、杭（くい）の周り3メートルほどはきれいに草がなくなるが、日に3時間ほどはけたたましい声で鳴き続ける。英語ではパーと鳴くというのだが、確かにメエメエなんてカワイイものではなく、のどを震わせベエベエと叫ぶ。畑でできた胡瓜（きゅうり）を10本ほど持って近所の家に謝りに行くと、「声帯を、ピッ、って切ったら」とその亭主に不機嫌な顔で言われ、女房は身を縮めて何度も頭を下げる。

つながれてばかりでは可哀そうだと散歩に連れ出すと、通りすがりの人が「えっ、

犬にしては変だと思ったら角（つの）がある。え、ヤギだよ」と自転車から身をのりだして、落ちこちかねないほど振り返って見ていくのはいいのだが、この山羊、あっちの雑草を食べ、こっちの落ち葉を食べ、帰らない。綱を引っ張られると、2つに割れた蹄（ひづめ）を踏ん張って抵抗する。果ては前足を折り曲げ、道路の真ん中に坐りこむ。たまりかねた女房が抱いて歩き出すと、伸びかけの角を引っ掛けられる。雌山羊は角がないはずじゃなかったのか、と女房はいぶかる。「雑種ですからねえ」と言われはしたが。

どうも小屋育ちは、屋間でも青天井の下はだだっ広くて不安らしい、と女房が気がついたのはしばらくたってからである。小屋に入っているほうがおとなしい。

わからないものだ。

犬じゃあるまいし、と散歩を中止されてもこの山羊は文句は言わなかった。夫婦がイタリアに住んでいたころ、アルプスの山にハイキングに行くと、牛に混じって、日本のものより一回り骨組みの大きな山羊が何匹か草原に放牧されており、うちの1匹が長い山羊ひげを突き出し肩をいからせ、堂々と人間の散策道をふさいで立っていた。その記憶から歩かせねば、と思ったのだが、誤解だったらしい。

ひと月ほどすると新居にも慣れ、山羊は静かになった。

もの好きな亭主は、畑の大きくなりすぎた胡瓜を山羊にやってみる。食べる。

堅くなった茄子（なすび）にオクラ、大根、ピーマン、生のじゃが芋、みな食べる。甘いトマトや熟柿（じゅくし）ときたら大好きである。赤い汁で口の端が紅をさしたようになる。

「ゴーヤは？」

苦いのに辟易（へきえき）した中学生の次男が問うた。

亭主がさしだすと、興味津々（しんしん）で家族が見守る中、山羊はボリボリと半分まで食べ、そして表情は変わらず黙ったまま、それ以上口を開けなくなった。味はわかるらしい。

今では山羊が家の周りの草をおおかた食べつくしてしまった。平らでスッキリ



気持ちがいい。家にいる女房は、暇があれば日に 2 時間ほど、麦わら帽と椅子と本を持ち、山羊の鎖を引いて外に出る。団地に山ほど残っているよその空き地の草を山羊に食べさせながら、女房は骨粗しょう症予防用に日光を浴びて本を読む。

陽（ひ）の光に薄（すすき）の穂が揺れ、平和な秋の日である。